

一切智の夢

表紙の人

松澤佑次

一切智とは仏教用語で、「すべてを知っている人、あるいはすべてを知ること」の意味であるが、私が尊敬する同郷の偉人、南方熊楠がしばしば使った言葉であり、熊楠の学者としての生き方とこの言葉を私の研究生活のよりどころにしてきた。熊楠が博物学や粘菌学など極めて広い分野でZaimu誌に50篇の論文を掲載させたという事実は知られているが、私が尊敬するのは、その論文の数が多からではなく、彼の学問における日本人としての誇りに裏打ちされた国際性に学ぶことが多いからである。彼の学問上の自信や誇りは、物事を究める姿勢から培われたものである。

熊楠が高野山管長の土宣氏との書簡で展開した学問の方法論は「南方曼荼羅」という思想に集約

されているが、そのキーワードの一つが、物事を明らかにしても究極はなく、さらに底のない深いレベルの実在が働いているという「不思議」という概念である。「不思議」と「一切智」はほぼ共通の概念で使われたと思われるが、熊楠のいう「一切智」とは、宇宙の全てを把握することではなく、むしろ物事の無限に対して驚く心や、楽しむ心のことであったと思われる。彼は自ら見出した事象を信じ、当時の世界の権威である欧米の学者に対して西洋コンプレックスなど全く感じることもなく意気軒昂に論争して彼らを打ち負かした。

熊楠がZaimu誌などで大きな敬意を払われていた理由の一つとして、彼が自らの学問的基盤で



ある和漢書から得た知識を信頼し、その結果徹底して非西洋側からの発信を貫いたことを挙げることもができる。彼は「小生が海外で出したものは、おそらくわが邦の書籍を欧州のものと対等に引用し、彼方のものは困るにかかわらず、押し付けて長々と丁巻付を本文中に印せしめたものと思う。また支那・欧州書に出でること、なるべく邦人の書に出でたる方を多く引き置いた。」と記している。

私は動脈硬化、脂質異常、肥満の研究をライフワークにしてきたが研究を始めた時期はこれらの関連疾患の頻度が高かった欧米が研究の先進国で、多くの情報を彼らから習いながら研究を進めたものであった。しかしこの分野の疾患は、栄養や生活習慣などが大きく影響することから、欧米の知識を追従して彼らとの共通部分つまりグローバルスタンダードに基づいた現象を追求するだけでは十分でなく、わが国独自の部分を明らかにすることが極めて重要であることを痛感するようになった。肥満やメタボリックシンドロームの研究や診療についても、肥満の質を論じる余裕のないくらいに高度肥満が増えすぎている欧米と違って、日本人の軽度肥満のきめ細かい分析から得られた内臓脂肪やアディポサイトカインの概念があるからこそ科学的な分析が可能であり、ウエストの基準を欧米に合わせたものにするかどうか、などの次元ではないのである。

もちろんこのような問題は熊楠のスケールからすれば取るに足らないものであるが、彼が示して

くれた、日本人の誇りに裏打ちされた卓越した国際性は今日の国際社会の中で価値を問われている日本人にとって最も重要な課題であると思われる。多くの日本の若手研究者が「一切智の夢」を基に、国際社会で活躍されることを願っている。

(財団法人住友病院 院長)

